

白山ふるさと文学賞

第四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 最優秀賞

感謝は生き方だけでなく人も変える

鳥越中学校一年

米澤 よねざわ

愛 こころ

私が五歳の時、母が大腸ガンで入院した。まだ幼かった私は当時のことを鮮明には覚えていない。ただ、母の泣いていた顔だけが今も決して忘れる事なく、脳裏に焼きついている。毎日、父と姉と共にお見舞に行っていた。母は私達の顔を見ると笑顔で「いつもありがと。」と言ってくれた。でも、ふと私が保育園の話をする時、急に一つぶ一つぶと涙を流し「ごめんね。側に居てあげられなくて。」と謝ってきた。そこには、母の本当の気持ち詰まっていた事が今になってやっと分かった。なぜ、あの時「大丈夫だよ。ありがと。」と言ってあげられなかったのだろうか。

この前、母の部屋で、一冊のノートを見つけた。結んであるヒモを解き、そつと開いてみるとそれは、闘病記だった。中には、検査の内容など日々の日記がぎつしりと書かれていた。私の目に真っ先に飛び込んできたのは、赤色で太く書かれた「人は何かを得ると、必ず何かを失うのだろうか。」という一言。自分の心に響いたからか、涙が止まらなくなってきた。母は、私のさみしいと思う気持ちの何倍も辛かったのだと初めて気付いた。今、思うといつもの笑顔が無理をしていた証拠なのかなと感じる。なんで、もっと早く気付いて、「無理しないで。」って言えなかったのだろうか。自分が情けなくて仕方ない。でも、もしかしたら母は気付いてほしくなかったのかもしれない。そう思いながら、一枚一枚ページをめくっていくと、最後のページに「長い間さみしい思いをさせてごめんね。いつも笑顔をありがと。」と書かれていた。その時、私は改めて不甲斐ない自分と向き合うことになった。

「一番辛かったのは母なのになんで私は支えられなかったんだろう。」そう思うと辛くて辛くて仕方なかった。せめて、感謝の気持ちをもっとたくさん伝えておけば良かった。そしてらもつと母が病気の時に、心の底からの笑顔が見られたかもしれないにとすごく後悔した。

私は、土日に手術をする為入院した。そこで初めて死を近くに感じた。人は死を見ると今までどれだけ幸せだったかが分かるのだと知った。また、それと同時にこれからの生き方についても考える。それは、マラソ

ンのように。マラソンはゴールに向かってペース配分をよく考えて走る。だから、どこかマラソンと人生は似ているように感じる。人はいずれ死を迎える。それが、マラソンで言うゴールというものなのかもしれない。今まで、私は幸せというものを忘れていた気がする。なぜかというところ、感謝の気持ちを忘れていたからだ。何事も、ありがたみを感じて、嬉しくなる時に幸せだなと思うと思う。だから、感謝の気持ちを忘れている人は、本当の幸せに気付いていないと思う。実際に私もそうだ。全てにおいて当たり前だと思いついて、感謝の気持ちを忘れていた。感謝の気持ちを伝える「ありがと。」は、人と人を繋ぐ大切な言葉であり、人をも変える言葉なのだ。もし、「ありがと。」という言葉がなくなってしまったら幸せを感じられなくなるかもしれない。だから普段から、感謝の気持ちを忘れてはいけないと私は思った。

みなさんにとって家族とはどのようなものだろうか。私にとって家族というのは、空気だ。なくてはならない存在だから。でも、空気のように感じているからこそ、感謝の気持ちを伝える事を忘れてしまっているのかもしれない。空気は当たり前前の存在。私は家族もそのように捉えてしまっているのかもしれない。当たり前前の存在だからこそ、感謝することを忘れてはいけないのに。初めて母と離れた時、もつと一緒に居たかっと思つた。それだけではない。もつと「ありがと。」って言うたかっと思つた。家族とは難しいものなのかもしれない。父も母も同じように入院をくり返してきた。父は、腎臓が破裂するなど、どれも助かるのか危ういものばかりだった。毎回、そのような事があってから、感謝の気持ちを伝えたいものばかりだった。家族は当たり前前のものだけれど、感謝の気持ちを忘れてはいけない。私の家は、癌家系だ。もしかしたら、私も将来なるのかもしれない。でも病気が教えてくれるものは、怖さや苦しみだけでなく日々の幸せなのだと思う。だからこそ、今からでもいい。日々感謝し、幸せと思える人生を歩んで行きたいと思う。

私は、これから感謝をする事を忘れず人々と共に協力して生きていこ

うと思う。それが私なりの生き方。いや、それが人々が幸せと思える生き方なのだから。身近にある存在こそ大切にし、日々の感謝を忘れてはいけない。だって忘れたら、本当の幸せに気付く事ができなくなるのだから。

